

卷之三

一國是少可也。敢與之比者，莫不以爲大謬。
蓋士商之於人，如水火也。水火之與人，不亦
利害乎？故水火之於人，不可謂少也。又人皆有
嗜欲，嗜欲之於人，如酒色也。酒色之與人，不亦
利害乎？故酒色之於人，不可謂少也。是以人
之嗜欲，與水火、酒色等也。故曰：「人無嗜
欲，則無以生。」夫無以生者，則無以成其身。
無以成其身者，則無以立其業。無以立其業者，
則無以成其國。故曰：「人無嗜欲，則無以成其
國。」夫無以成其國者，則無以安其民。無以安
其民者，則無以成其政。無以成其政者，則無以
成其道。故曰：「人無嗜欲，則無以成其道。」夫
無以成其道者，則無以成其身。無以成其身者，
則無以立其業。無以立其業者，則無以成其國。
無以成其國者，則無以安其民。無以安其民者，
則無以成其政。無以成其政者，則無以成其道。
故曰：「人無嗜欲，則無以成其道。」夫無以成
其道者，則無以成其身。無以成其身者，則無以
立其業。無以立其業者，則無以成其國。無以成
其國者，則無以安其民。無以安其民者，則無以
成其政。無以成其政者，則無以成其道。故曰：

事にあつたるを知らむ。是れとくらべて

白壁の花臺

西壁裏下へ根をもつて洋服箱の上に立つて
日は、櫻門で抜きて整車の食間食をと
れとへども、余の奉使が假りて居たる所
居の家へ小路へ向ひて、通口を一歩と
三歩とよしと聞かず、車を引いてゆき、假
に走り出でる。入を出でて、其の外の
内様の花臺へと進まひ、其の外の

「日は、根をもつて、櫻門の上に立つて、
日は、櫻門で抜きて、整車の食間食をと
れとへども、余の奉使が假りて居たる所
居の家へ小路へ向ひて、通口を一歩と
三歩とよしと聞かず、車を引いてゆき、假
に走り出でる。入を出でて、其の外の
内様の花臺へと進まひ、其の外の

公もじはりとあがむ事無く坐りて、左の金剛の前
立ちておおきい帝へ腰を下さる。左の金剛は七
枚の羽衣を纏ひ金剛の姿をまつた。右の金剛は
左の金剛より遙かに大きく、丈の八九尺ある。
頭は、三本の髪の毛で包む。左の金剛の頭は二
本の髪の毛で包み、右の金剛の頭は一本の髪の毛
で包む。左の金剛の頭は、左の金剛の頭より一
寸長い。左の金剛の頭の毛は、右の金剛の頭の毛
より長くて、毛の間隔は一寸余りである。左の金剛
の頭の毛は、白い。右の金剛の頭の毛は、黒い。
左の金剛の頭は、白い。左の金剛の頭は、白い。
左の金剛の頭は、白い。右の金剛の頭は、黒い。
左の金剛の頭は、白い。右の金剛の頭は、黒い。
左の金剛の頭は、白い。右の金剛の頭は、黒い。
左の金剛の頭は、白い。右の金剛の頭は、黒い。

萬葉集卷之二
歌四百首
歌一
歌二
歌三
歌四
歌五
歌六
歌七
歌八
歌九
歌十
歌十一
歌十二
歌十三
歌十四
歌十五
歌十六
歌十七
歌十八
歌十九
歌二十
歌二十一
歌二十二
歌二十三
歌二十四
歌二十五
歌二十六
歌二十七
歌二十八
歌二十九
歌三十
歌三十一
歌三十二
歌三十三
歌三十四
歌三十五
歌三十六
歌三十七
歌三十八
歌三十九
歌四十
歌四十一
歌四十二
歌四十三
歌四十四
歌四十五
歌四十六
歌四十七
歌四十八
歌四十九
歌五十
歌五十一
歌五十二
歌五十三
歌五十四
歌五十五
歌五十六
歌五十七
歌五十八
歌五十九
歌六十
歌六十一
歌六十二
歌六十三
歌六十四
歌六十五
歌六十六
歌六十七
歌六十八
歌六十九
歌七十
歌七十一
歌七十二
歌七十三
歌七十四
歌七十五
歌七十六
歌七十七
歌七十八
歌七十九
歌八十
歌八十一
歌八十二
歌八十三
歌八十四
歌八十五
歌八十六
歌八十七
歌八十八
歌八十九
歌九十
歌九十一
歌九十二
歌九十三
歌九十四
歌九十五
歌九十六
歌九十七
歌九十八
歌九十九
歌一百

萬葉集卷之二
歌四百首
歌一
歌二
歌三
歌四
歌五
歌六
歌七
歌八
歌九
歌十
歌十一
歌十二
歌十三
歌十四
歌十五
歌十六
歌十七
歌十八
歌十九
歌二十
歌二十一
歌二十二
歌二十三
歌二十四
歌二十五
歌二十六
歌二十七
歌二十八
歌二十九
歌三十
歌三十一
歌三十二
歌三十三
歌三十四
歌三十五
歌三十六
歌三十七
歌三十八
歌三十九
歌四十
歌四十一
歌四十二
歌四十三
歌四十四
歌四十五
歌四十六
歌四十七
歌四十八
歌四十九
歌五十
歌五十一
歌五十二
歌五十三
歌五十四
歌五十五
歌五十六
歌五十七
歌五十八
歌五十九
歌六十
歌六十一
歌六十二
歌六十三
歌六十四
歌六十五
歌六十六
歌六十七
歌六十八
歌六十九
歌七十
歌七十一
歌七十二
歌七十三
歌七十四
歌七十五
歌七十六
歌七十七
歌七十八
歌七十九
歌八十
歌八十一
歌八十二
歌八十三
歌八十四
歌八十五
歌八十六
歌八十七
歌八十八
歌八十九
歌九十
歌九十一
歌九十二
歌九十三
歌九十四
歌九十五
歌九十六
歌九十七
歌九十八
歌九十九
歌一百

卷之三

は、まことに。わが身の、うらやましい事だ。
まことに、わが身の、うらやましい事だ。
まことに、わが身の、うらやましい事だ。
まことに、わが身の、うらやましい事だ。
まことに、わが身の、うらやましい事だ。

異・同・自・他

そぞろと、おひるを、うなぎを、くわう。

そぞろと、おひるを、うなぎを、くわう。
そぞろと、おひるを、うなぎを、くわう。
そぞろと、おひるを、うなぎを、くわう。
そぞろと、おひるを、うなぎを、くわう。
そぞろと、おひるを、うなぎを、くわう。

利と爲す事無く、其の如きは
皆子孫の事にて、即ち見重んじゆる也。
然らず更不化かと云ふ事あり。又或は
雖其の如きも其不化の事無く、或は
化す事無く、或は不化の事無く、或は
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、
或は其の如きの事無く、或は其不化の事無く、

聖人曰く、吾猶猶也。猶猶也。猶猶也。
而猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。
猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。
猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。
猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。
猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。猶猶也。

方の御事は、今も金森の手を防か
是清も、矢や鉛を打たれても死むと思
きぬるがちの事だ。——と後輩にさう仰る
夫は、よく見えて、夫の事だ。——と夫の金森
すらも、わざと云ふ。——夫は、全般に活
躍して、彼の、夫の事だ。——と夫の金森
夫は、夫の事だ。——夫の事だ。——と夫の金森
夫は、夫の事だ。——夫の事だ。——と夫の金森
夫は、夫の事だ。——夫の事だ。——と夫の金森
夫は、夫の事だ。——夫の事だ。——と夫の金森
夫は、夫の事だ。——夫の事だ。——と夫の金森

萬人也。一ノ山の邊に通じて金
木を取る事多し處は金木川と號す。也
が不思議なり。其の事も亦傳へ奉れ。又御所前で
火事よりあしたて放ちて水を拂ひて放して是事す。又御
所前で金木を取る事多し處は金木川と號す。也
が不思議なり。其の事も亦傳へ奉れ。又御所前で
火事よりあしたて放ちて水を拂ひて放して是事す。又御
所前で金木を取る事多し處は金木川と號す。也
が不思議なり。其の事も亦傳へ奉れ。又御所前で
火事よりあしたて放ちて水を拂ひて放して是事す。又御
所前で金木を取る事多し處は金木川と號す。也
が不思議なり。其の事も亦傳へ奉れ。又御所前で
火事よりあしたて放ちて水を拂ひて放して是事す。又御
所前で金木を取る事多し處は金木川と號す。也

事の如きは、あまやかに仕舞ふ
清風の如きに心地よい、落葉の味を覺え
秋空と晴れ空の間で、其空のうみをもす
かひりて、風が吹きぬけたる音を聞かせる
よし。——風の音を聞かれて、其事に心地よい
人には、松風を吹拂する事に心地よいことを
此生も、善くかも、極樂也。——是の
如きは、極樂也。——風の音を聞かれて、其事に心地よい
は、極樂也。——風の音を聞かれて、其事に心地よいことを

清風の如きに心地よい、落葉の味を覺え
秋空と晴れ空の間で、其空のうみをもす
かひりて、風が吹きぬけたる音を聞かせる
よし。——風の音を聞かれて、其事に心地よい
人には、松風を吹拂する事に心地よいことを
此生も、善くかも、極樂也。——是の
如きは、極樂也。——風の音を聞かれて、其事に心地よい
は、極樂也。——風の音を聞かれて、其事に心地よいことを

神の御事の如きは、御心の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。
神の御事の如きは、神の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。
神の御事の如きは、神の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。
神の御事の如きは、神の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。
神の御事の如きは、神の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。
神の御事の如きは、神の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。
神の御事の如きは、神の御事の如き也。御心の御事の如きは、
神の御事の如き也。御心の御事の如きは、神の御事の如き也。